猛暑のオリンピック建設現場
灼熱の過酷な労働環境
―これで持続可能なオリンピックといえるのか。―

2019年9月2日　国際人権NGO ヒューマンライツ・ナウ

1. 調査の経緯

(1) 2019年8月、東京オリンピック・パラリンピック開催まで1年を切った。東京オリンピック・パラリンピックは、オリンピック憲章に基づき、持続可能なオリンピックを標榜している。

2011年に国連人権理事会が採択した国連ビジネスと人権に関するガイドラインをふまえるならば、オリンピック・パラリンピックに関連する事業、その準備、調達は、人権に配慮して実施されなければならない。この点で、オリンピック競技場建設に関わる建設労働者の人権、労働環境は、最も直接的にオリンピック・パラリンピック関連事業実施に関わる人権問題であるが、深刻に憂慮される状況が指摘されてきた。厚生労働省の公式データでも2018年末までの間に、オリンピック建設関連で2名の労働者が死亡している。建設が完成に向けて佳境に入る中、労働者の労働環境は一層過酷なものとなるのではないか、との懸念から、国際人権NGOヒューマンライツ・ナウは、建設現場のモニタリングを開始した。

(2) 本報告書は本年8月2日の現地モニタリングの結果を中心とするものである。

2019年8月の東京の熱さは殺人的な状況であり、2019年8月の東京の平均気温の平均は28・4度、最高気温の平均は32・8度であった。8月2日もそのような1日であった。総務省消防庁によれば、2019年7月29日～8月4日に熱中症で救急搬送された人は全国で18，347人（速報値）、東京都は全国一位の1857人であった。2019年8月5日～8月11日は全国で12，751人（速報値）、東京都は全国一位の1465人であった。こうした危険なほどの暑さの中、来年のオリンピックが開催されるとすれば、アスリートや観客、関係者の安全が強く懸念され、競技中に最悪の場合、死者が出てしまう恐れがあると懸念される。

大会開催に関して様々な懸念がある中、現時点で心配すべきことはこのような炎天下の環境で働く、オリンピック・パラリンピック開催に関連する現在建設中の施設で作業に従事する労働者の労働環境である。

8月2日、チームは、いくつかのオリンピックサイトを訪問し、状況を確認した結果、炎天下における作業が著しく過酷であること、労働者の人権上の配慮に欠ける深刻な懸念があること、それが死亡のリスクに直結するものであることを確認し、急遽本報告書をまとめることにしたものである。ヒューマンライツ・ナウによる本年8月2日の現地モニタリングの直後、8月8日に東京ビッグサイト（江東区有明）の仮設・オーバーレイ工事に従事していた男性作業員が死亡し、熱中症とみられるとの報道があった。炎天下の作業の末に亡くなったら労働者の方に心から哀悼の意を捧げるとともに、今後同様の犠牲が二度と生じないよう対応を求めるため、報告書を公表することとした。

2. 調査の対象と概要、気象条件

(1) オリンピック・パラリンピックの開催会場

オリンピック・パラリンピックの開催会場は、多くが東京のベイエリアに集中し、建設は佳境を迎えている。国際人権NGOヒューマンライツ・ナウのモニタリングチームは、これらの施設の建設に従事するオリンピック関係労働者の方々の労働環境のモニタリングを開始した。具体的には、7月4日、7月5日、7月9日、7月12日、7月24日、8月2日の6回にわたり、ヒューマンライツ・ナウのモニタリングチームは、下記の建設中の競技施設を訪問し、外部から労働者の働く環境を確認するとともに労働者に対する簡単な聞き取りをいくつか行った。

記

オリンピックスタジアム・有明体操競技場・有明アリーナ・有明アーバンスポーツパーク・東京アクアティクスセンター・選手村

(2) 2019年8月2日のモニタリング

2019年8月2日、ヒューマンライツ・ナウのモニタリングチームは東京五輪開催会場の多くが存在する東京ベイエリアへと足を運んだ。

具体的には、ヒューマンライツ・ナウのモニタリングチームは、有明地区：有明体操競技場・有明アリーナ・有明アーバンスポーツパーク晴海地区：オリンピック村へと移動し、視察を行った。この日の東京の最高気温は35度と予想され、同日朝、NHKの朝のニュース番組では、熱中症の危険があるため、不要不急の外出は控えるよう呼びかけるアナウンスが繰り返されていた。

気象庁が発表した、東京都「江戸川臨海」地域の2019年8月2日の1時間ごとの気象データは以下のとおりである。

時	降水量	気温（℃）	風速・風向(m/s) 風速	風向	日照時間(h)	雪(cm) 降雪	積雪
8	0.0	29.3	2.8	南	1.0	///	///
9	0.0	29.8	3.7	南	1.0	///	///
10	0.0	30.7	3.6	南	1.0	///	///
11	0.0	31.4	3.8	南	1.0	///	///
12	0.0	32.1	4.8	南	1.0	///	///
13	0.0	32.3	5.7	南南西	1.0	///	///
14	0.0	32.1	7.1	南南西	1.0	///	///
15	0.0	31.5	8.3	南南西	1.0	///	///
16	0.0	30.6	8.9	南南西	1.0	///	///
17	0.0	30.1	8.1	南南西	1.0	///	///
18	0.0	29.0	7.2	南南西	1.0	///	///
19	0.0	28.3	7.5	南南西	0.1	///	///

一方、検索サイトGoogleには、同日の東京都の気候について、最高気温最低気温35・1、最低気温27・1との表示がある。

環境省の熱中症予防情報サイトによれば、31度以上は日常生活レベルで危険、運動は原則中止とされている。

3. 有明の施設 炎天下で働く人たち

(1)「有明アーバンスポーツパーク」

ヒューマンライツ・ナウのモニタリングチームはまず、有明テニスの森駅から「有明アーバンスポーツパーク」として設営準備されている自転車競技場の外観を確認した。ウォーターフロントエリアの有明北地区に建設中のこの施設は、自転車競技のBMXレーシング、BMXフリースタイルの他、スケートボードも実施される予定とされる。現地では、たくさんの労働者が炎天下働いていた。有明テニスの森駅においては、午前10時17分の温度、湿度、体感温度を臨時測定にて測ったところ、この時点で32度、湿度は75パーセント、体感温度は43度であった。

建設現場は炎天下で日陰はなく、野外の作業が続いていた。

(2) 有明体操競技場

次に有明体操競技場の建設現場に向かった。

大会時には、約12，000人の客席数を有する競技場が建設される予定であり、オリンピックでは体操（体操・新体操・トランポリン）、パラリンピックでは ボッチャが行われる予定とされる。

工事現場に表示された気候条件を撮影した。現場の表示では、温度が35度、湿度は45度とされていた。しかし、有明体操競技場は、有明テニスの森駅を最寄り駅とし、「有明アーバンスポーツパーク」からさほど遠くない。

有明テニスの森駅から「有明アーバンスポーツパーク」を見下ろす位置で湿度が75パーセントと表示されており、現場の湿度が45パーセントなのかは疑問である。

建設現場では、たくさんの人が炎天下で働いていた。工事に必要な安全対策として、全身長袖、ヘルメット着用が必須である。そのため猛暑のなか、さらに暑く過酷な環境である。中には、服の中にファンが装着されて涼しくなるような作業着を着ている労働者もいたが、全員ではなかった。

労働者の方から聞いた証言によれば、「下請け会社ごとに違い、支給されているところもあれば、支給されていないところもある。個人で買う人もいる」という。当然、建物の中での作業もあり、中は熱がこもってさらに暑いはずである。しかし、少なくとも今回に先立ち、7月に労働者の方から聞いた限りでは、内部に空調設備は設置されていないとのことであった。エアコンを設置するのがまさに彼らの仕事であり、「これから設置する」予定だと言う。

熱中症対策としてなのか、ポカリスエット粉末が大量に現場においてあることは確認したが、対策としては十分ではないだろう。

(3) 有明アリーナ（仮称）

続いて、有明アリーナ（仮称）に赴いた。ここでは、オリンピックでは、バレーボール、パラリンピックでは、車いすバスケットボール開催が予定されている。

ここでも、炎天下で多くの労働者が働いていた。労働者からの聞き取りによると、ここでは外国人労働者もたくさん働いているという。外国人労働者が日本に来て突然の暑さで慣れない炎天下の業務に従事することによる健康へのリスクの大きさが懸念される。また、他の産業では顕在化している技能実習生に対する劣悪な労働環境や労災リスクも懸念される。

携帯アプリで離れた場所から温度湿度を測定してみた結果、温度は31度強、湿度は88パーセント、体感温度は45度以上であった。内部ではさらに暑いことが予想され、室内作業の過酷さがうかがえる。

4. 晴海 灼熱の選手村の状況

モニタリングチームは、晴海の選手村建設現場にも足を運んだ。ここでは東京五輪を象徴するようなマークやイラストがたくさん見られた。

非常に広大な地域が選手村となるようで、大規模再開発が進んでいた。

選手村のある地域は選手用の建設中の高いビルばかりで、周りに木々がなかったため、先ほどの建設現場よりもさらに暑く感じた。建設中の選手村はまるで高級マンションのようで、実際にオリンピックの後はマンションとしての使用・販売が予定されているようだ。和風の風情で建設されているシックな外観のものもある。ここでも気温は高く、離れたところからでも、気温33度、湿度73パーセント、体感温度45度と計測された。現場には休憩所が設置され、適宜休憩をとれるようだが、健康対策は万全なのか、気がかりである。熱中症予防を中心に、労働環境への配慮を抜本的に強化する必要がある。

5. 過酷な労働環境

今回の我々のモニタリングは正式な調査ではなく、温度湿度等も簡易測定にすぎなかった。しかし、それでも労働者の安全と健康に対して、重大な懸念を感じざるを得なかった。チームは午前中にモニタリングを終了したが、午後に入り、どんどん最高気温に近づいていくにつれて一層過酷な環境となったことが予想された。なお、今回のモニタリングチームの一員は、約1時間半程度の視察（バス、タクシーで移動時間を含む）で、頭痛など、軽い熱中症の兆候を呈した。そのため、モニタリングチームは調査を終了した。

6.「命がいくつあっても」国際団体の調査への対応

オリンピック・パラリンピックの建設現場をめぐっては国際団体も調査を行い、問題点が指摘されている。国際建設林業労働組合連盟（BWI、本部・ジュネーブ）は、2019年2月3日、東京オリンピック・パラリンピック関連の建設現場で働く人たちの労働環境について、東京都内で聞き取り調査を行った。BWIに加盟する労組「全国建設労働組合総連合」（全建総連）が依頼を受け、新国立競技場や選手村などの建設現場で働く労働者40人を集め、聞き取りとアンケート調査を実施した。報道によれば、選手村で働いていた男性は、「誤った作業手順が進められ、極めて危険で、命がいくつあっても足りない」と話したという。工期も当初言われた時よりも短い時間で仕上げるように指示され、「現場は、せかされ、追い詰められている」などと語ったとされる。また、「情報統制がすごい」「外国人の技能実習生には、資材を引き上げるなど単純作業を行わせていて、見ていてかわいそう」などの意見もあったという。調査をふまえ、BWIは今年5月調

（3面へつづく）